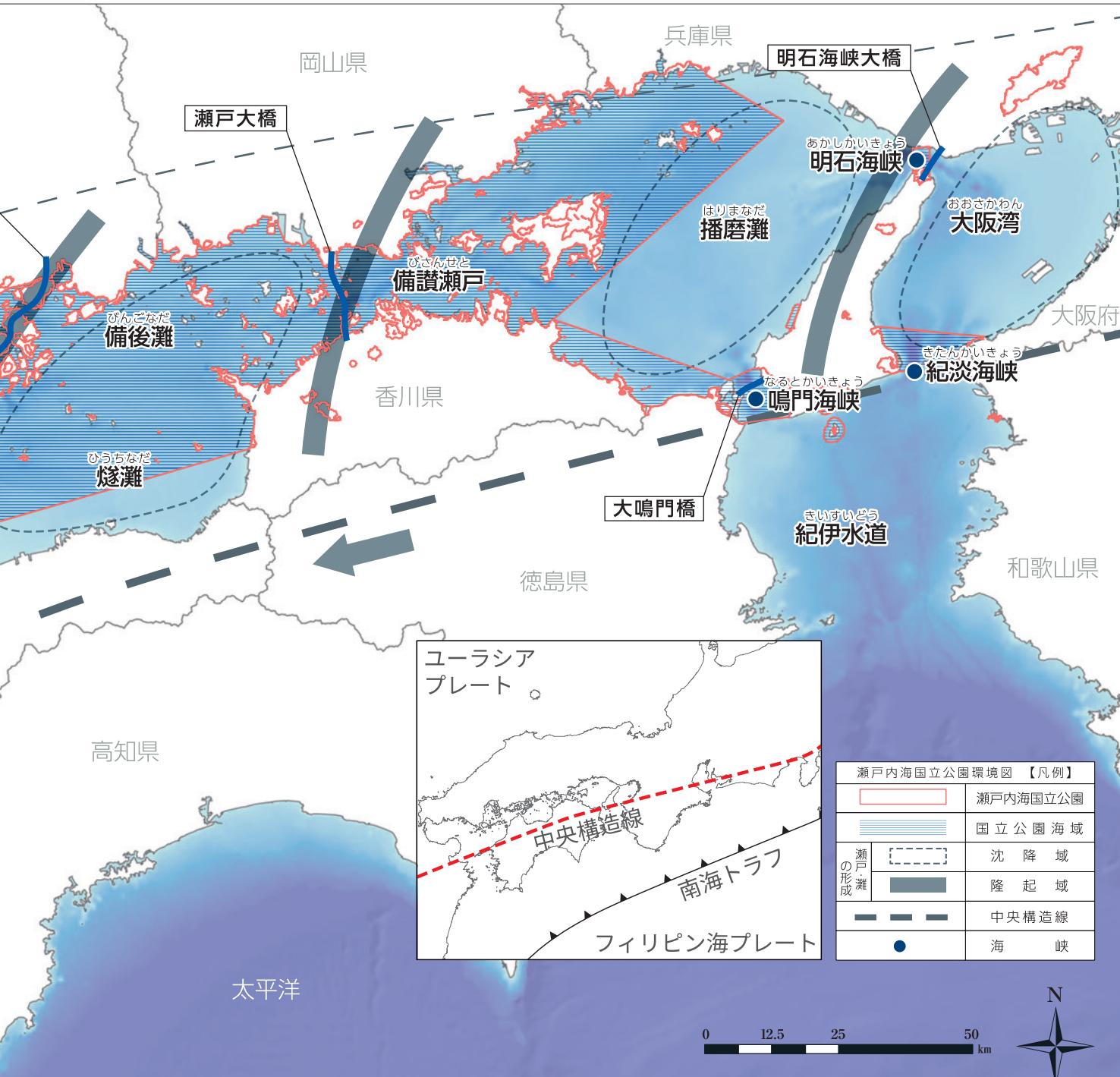


大地の成り立ちとシワ、つかの間の海 ~キーとなる5つの時代~

- ☑ 約1億年前：ユーラシア大陸で激しい火山活動が起こり、地下深くではマグマがゆっくり冷えて花崗岩がつくられていきました。
- ☑ 約2,000万年前から1,500万年前：瀬戸内海の土台となる花崗岩がユーラシア大陸の東縁から分離して、現在の日本列島のもとができました。その後、日本海が拡大するのにともない日本列島は太平洋側へ移動しました。
- ☑ 約1,400万年前：日本列島では火山活動が盛んになり、中国山地が隆起するとともに瀬戸内海が沈降しました。瀬戸内海周辺では、「瀬戸内火山活動」と同時に四国の地下に花崗岩が形成されました。花崗岩はその後隆起して、東西方向の四国山地と南北方向の半島と岬を形成しました。
- ☑ 約300万年前以降：フィリピン海プレートの運動方向が北から北西向きへと変わり、そのことで、長大な断層である中央構造線が「右横ずれ断層運動」を起こして讃岐山脈が隆起しました。斜め沈み込みによって現在の瀬戸内海部分は沈み、灘と瀬戸の原型となつた凹凸の「シワ」が形成されました。
- ☑ 約1万年前：氷期から間氷期に向かう急速な温暖化による海面上昇によって、豊後水道と紀伊水道から海水が流入し、それまで盆地だった陸地が水没して瀬戸内海部分は海となりました。



* 濱戸：地盤の隆起域で島が多く、海の範囲が狭い場所。潮の流れが速い。
* 灘：地盤の沈降域で盆地状に凹み、海の範囲が広い場所。潮の流れは穏やか。



瀬戸内海の成り立ち～瀬戸内海は海なの？陸なの？～

- ユーラシア大陸の東縁が東西に引き裂かれて、日本海や日本列島の原型が誕生
- 瀬戸内火山活動と中国山地、四国山地の隆起によって、瀬戸内海式気候が誕生
- フィリピン海プレートの北西方向移動による中央構造線の横ずれによって、瀬戸の島々が誕生
- 氷期は陸に、間氷期は海水面上昇を繰り返し、約1万年前に現在の瀬戸内海が誕生

竜王山／広島県

地形からみる瀬戸内海

瀬戸内海は、東西南北を紀伊山地、九州山地、四国山地、中国山地に囲まれ、平均水深約38mの浅い海です。氷期になって海面が低下すると次第に海の範囲が狭くなり、海面が100m以上低下した約2万年前には、瀬戸内海は陸になっていました。瀬戸内海は、大小700余りの島々がありますが、それらは満遍なく散らばっているわけではありません。島が多く、陸が迫り出ている「瀬戸」、陸が広がり海が狭くなっている「海峡」、そして瀬戸や海峡の間には比較的海が広がる「灘」

があるように、瀬戸内海全体は「瀬戸(海峡)」と「灘」が繰り返して分布する地形となっています(P7、8参照)。



鳴門海峡(鳴門の渦潮)／徳島県

大地の成り立ち～瀬戸内海を特長づける5つの時代と地質学的できごと～

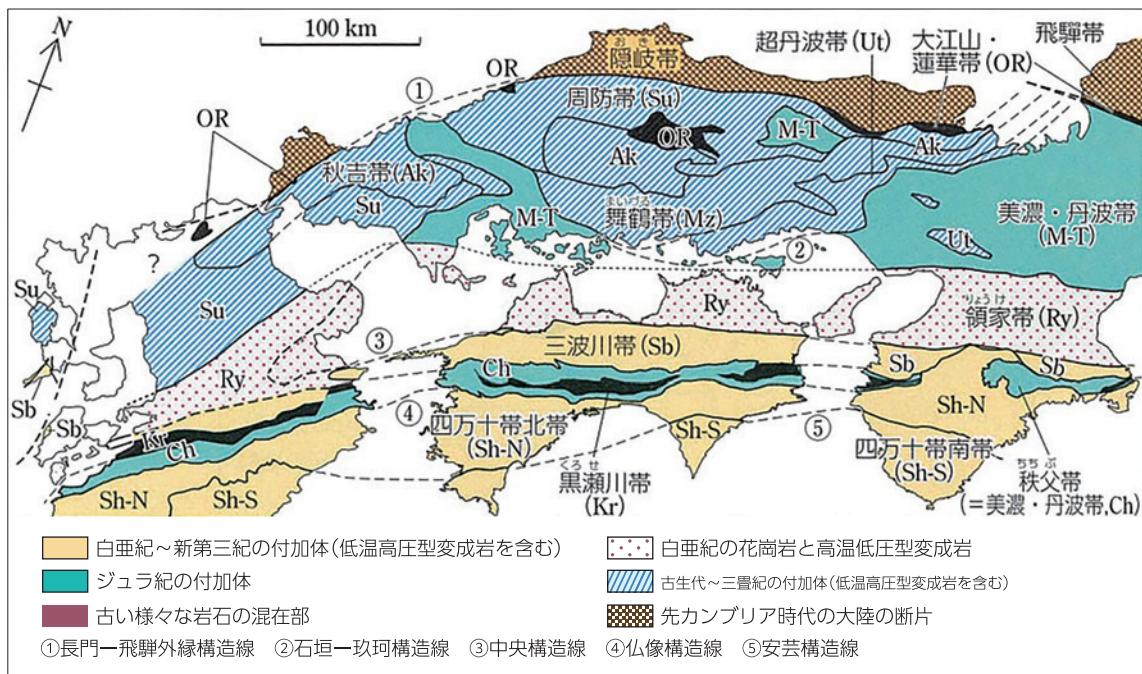
▶ 約1億年前：土台をなす花崗岩の形成

瀬戸内海の基盤をつくっているのは約1億年前(白亜紀後期)の花崗岩類です。花崗岩は地下5~10kmの所でゆっくり冷え固まった深成岩で比重が小さいため、冷え固まった後に隆起して山地を形成しました。岡山県の王子が岳のように、隆起して地表付近に出た花崗岩は、長期間の風化を受けることによって「マサ土」と呼ばれる白っぽい砂になります。

土石流や洪水などで川から海に運ばれた「マサ土」に

よってつくられた地形が、瀬戸内海の代表的な景観でもある白砂青松の砂浜であり、小豆島のエンジェルロードのように、本土または島と島をつなぐ陸繫砂州(トンボロ)です。そして、水深が浅いため、遠浅の砂浜や干潟はかつて塩田として広く利用されていました。

注)花崗岩形成の年代については、放射性年代測定値では9,000万年前から8,000万年前とされています。この年代は冷え固まって元素の移動がなくなった年代です。ただ、マグマができる年代はこれよりも古いことや環太平洋の花崗岩の形成時期も考慮して、この項では「約1億年前」という年代を使用しています。



西南日本の地質構造区分／出典：「高等学校 地学」(地学 701) (啓林館) p.178

約2,000万年前から1,500万年前：日本海の形成

日本列島はもともとアジア大陸（ユーラシア大陸の東側）の一部でしたが、約2,000万年前に大陸の東縁が東西に引き裂かれ、日本列島の地殻は大陸から離れました。やがてその裂け目には海水が入りました。これが後の日本海となります。

その頃、海底ではゆっくりと拡大が進み、マグマが噴き出す火山活動が起こっていました。マグマは海底や

地上へ噴き出て溶岩となり、溶岩は冷えて固まり、岩石となって堆積してきました。こうした大地の動きのなかで、西南日本は時計回り、東北日本は反時計回りに回り、現在の逆くの字型の日本列島の原型ができました。そして1,500万年前頃に日本海の拡大は終わり、現在の日本海が形成されました。

約1,400万年前：瀬戸内火山活動による岩石形成と瀬戸内海式気候の成立

瀬戸内海周辺では約1,400万年前に、フィリピン海プレートの沈み込みと融解により、短期間の激しい「瀬戸内火山活動」が起こりました。この火山活動と同時期に四国の地下に花崗岩が形成されました。

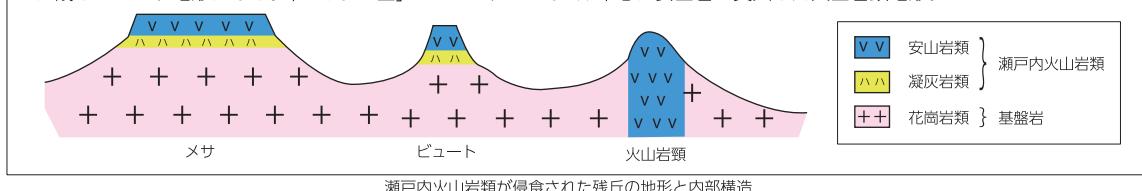
花崗岩はその後隆起して、東西方向の四国山地と南北方向の半島と岬（讃岐一室戸岬、高縄半島一足摺岬）を形成しました。こうした地形によって、「瀬戸内海式気候」が誕生しました。瀬戸内海式気候とは、南を四国山地、北を中国山地に囲まれ、夏冬ともに季節風がさえぎられ、山地で雨や雪を降らせた後の乾いた空気が瀬

戸内海沿岸地域に流れ込むことで、年間を通じて晴天の日が多く少雨・温暖なことが特長です。

また、サヌカイト*などの珍しい岩石が形成されたり、その後の侵食などによって香川県の屋島や飯野山、寒霞渓などの特長的な地形がつくられたりしました。飯野山のような円錐形の山は香川県では多く見られ、「おむすび山」として親しまれています。また、瀬戸内海の島々のうち、香川県の丸亀島や五色台の沖にある大槌島、小槌島などは、おむすび山が海に沈んでできた島です。

*サヌカイト：「讃岐石」ともいわれ、讃岐の名石として知られる黒色緻密で堅固な岩石。数少ない古銅輝石安山岩の一種。

固い安山岩溶岩が平たんな山頂を取り囲む崖を形成するメサ地形の代表的な場所は屋島。メサが侵食されると、山頂がわずかに残るビュート地形になる。「おむすび山」はビュートではなく、中心に安山岩が貫入した火山岩頸地形。



瀬戸内火山岩類が侵食された残丘の地形と内部構造

▶ 約300万年前：「中央構造線」の横ずれによる地形のシワ形成

約300万年前に、フィリピン海プレートの沈み込みが北向きから北西方向へと方向転換しました。これにより、四国を南北に分ける大断層「中央構造線*」は南側の地盤が西向きにずれる横ずれ断層として動き、北側の地盤は動かないユーラシアプレートによって、北東 - 南西方向にシワがよるように変形して隆起帯と

沈降帯が交互にできました。現在のような瀬戸内海ができるのはこれより後の時代ですが、このときの隆起帯が後の「瀬戸」となり、沈降帯が「灘」となりました（P7、8参照）。

*中央構造線：日本がまだアジア大陸の一部だった頃に誕生した関東から九州に伸びる長大な断層。海溝と平行に関東～九州へ続き、西南日本の地質構造を大きく二分している。

▶ 約1万年前：海水の侵入による瀬戸内海の完成

瀬戸内海に海水が侵入し始めたのは大阪湾で、約120万年前からとされています。それ以降、約10万年のサイクルで、氷期に海面が低下し陸地になり、間氷期には海水が侵入して海になるを繰り返すようになりました。

約2万年前の最終氷期の最盛期後には、陸だった瀬戸内海の区域に、海面上昇にともない紀伊・豊後の両水道

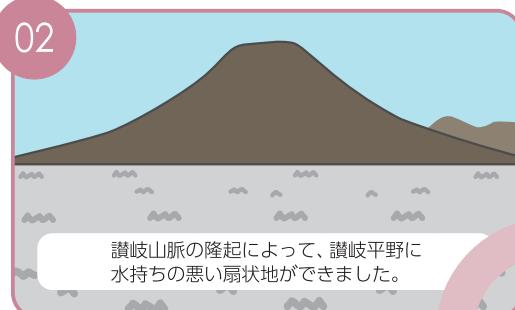
から海水が侵入し、海域を拡大していく、約1万年前頃にほぼ現在の瀬戸内海ができました。そして7,000～8,000年前に関門海峡から海水が入ったことで現在の瀬戸内海が完成したとされています。

このように地形の歴史からみると、瀬戸内海は最近の1万年程度だけ海になる場所、『ひとときの海』ともいえます。

TOPIC

[ジオと食のつながり せとうち讃岐ジオストーリー]
～なぜ讃岐はうどん県になったか～

02



讃岐山脈の隆起によって、讃岐平野に水持ちの悪い扇状地ができました。

01



中央構造線の動きによって讃岐山脈が隆起しました。

03



扇状地では渇水に備えて、ため池を築造すると共に裏作で小麦を栽培しました。

04



扇状地の小麦・伏流水・瀬戸内海の塩・しょうゆ・イリコが合って讃岐うどんになりました。

地域固有の歴史や風土・暮らしや食べ物は、その土地のジオ(大地、地形・地質)と深くつながっています。うどん県として知られる香川県では、「せとうち讃岐ジオストーリー」として、ジオとうどんのつながりをわかりやすく解説し、広めています。

難しいと思われがちなジオですが、身近な食とつなげて知ってみると、興味をもつことができ、地域や防災への理解も深まります。



寒霞渓／香川県

風景をつくる～花崗岩由来の代表的な風景～

- おむすび山や平たい山頂部から花崗岩と火山岩の構成や地層が分かる
- 白い砂浜の正体は、花崗岩が長年かけて風化し、陸から海に流れてきたマサ土

●瀬戸内海の多島美

島々が集まり、変化に富んだ瀬戸や海峡のある風景は、瀬戸内海国立公園を代表する風景のひとつです。なかでも香川県と岡山県の間に広がる「備讃瀬戸」の風景は、島の多さや形の多様さから瀬戸内海固有の多島美を象徴しています。

備讃瀬戸には、瀬戸内海の土台をつくる花崗岩類の上に瀬戸内火山岩類が分布している場所もあります。崩れにくい瀬戸内火山岩類が山頂付近にある島の多くは、標高が200mより高くなっています。一方で、土台

となる花崗岩は侵食を受けやすく、風化するとマサ土になります。こうした地質の違いにより、屋島や豊島のように山頂が平らなメサ、大槌島のようなおむすび島、寒霞渓のような渓谷と、険しくて変化に富む地形がつくられ、代表的な風景・景勝地となりました。なお、周辺の直島や大島などは花崗岩のみで構成される島のため、標高100m前後と低く、なだらかな形をしています。

●白砂青松

白い砂浜に青々とした松のある海岸は、日本の美しい風景のひとつとして「白砂青松」と呼ばれています。瀬戸内海沿岸にも白砂青松の浜が残されていますが、これらは江戸時代以降に、花崗岩の風化土壌であるマサ土が川から海に運ばれ堆積した浜に、潮や乾燥に強いクロマツを防風林として植林した場所とされています。白砂青松は、瀬戸内海の自然環境を生かしながら人の手でつくられた、美しい風景です。



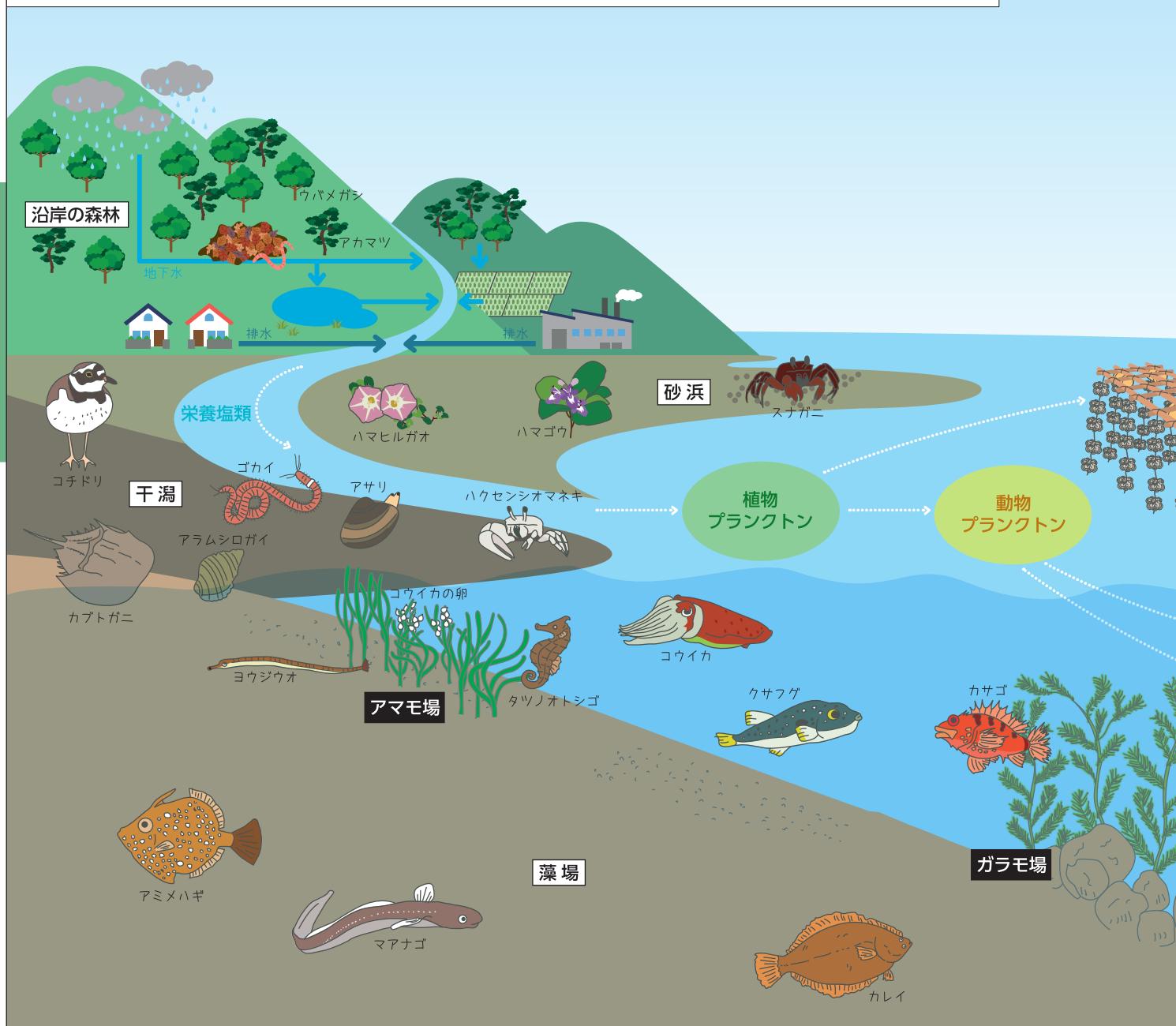
①小槌島と大槌島／香川県 ②屋島／香川県
③虹ヶ浜／山口県 ④慶野松原／兵庫県



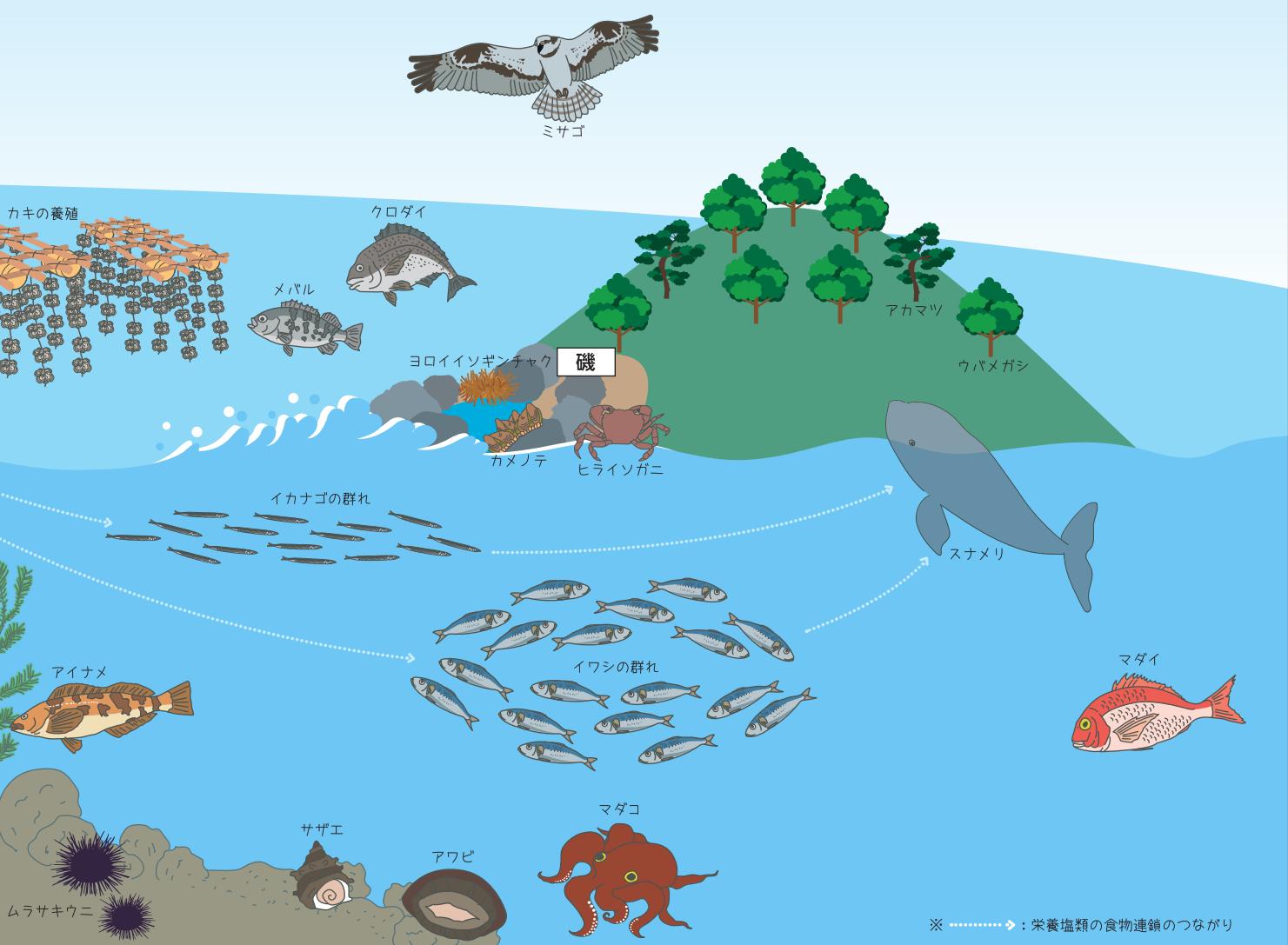
瀬戸内海の生態系と生きもの

瀬戸内海のさまざまな環境と生きもの

- ✓ 瀬戸内海沿岸域の砂浜や干潟、磯、藻場など多様な環境がつくりだされたのは、陸から川を通じて海に流れ込む土砂や大きな潮汐によるもの
- ✓ 瀬戸内海には多様な環境があることによって、それらを利用する動植物が生息・生育しています
- ✓ 瀬戸内海で生息する生きものは、陸から供給される栄養と食物連鎖のつながりをとおして生きています
- ✓ 陸と海とのつながりによって成り立つ、瀬戸内海の多様な環境とそこに生息する多様な生きもの



● 農業と漁業と森づくり



● 砂浜

マサ土由来の砂浜

山などで削りとられた土砂が川を伝い、沿岸の流れに乗って海岸に運ばれて堆積したものを砂浜といいます。兵庫県の慶野松原や愛媛県の桜井海岸のような、白または薄く黄色がかった色の砂浜が特長です。

瀬戸内海に広く分布する花崗岩は風化しやすく、細かく砕けると「マサ土」という砂となり、これが白っぽい砂浜の材料となります。周囲のほとんどを陸地で囲まれた瀬戸内海には、665本の水系と多くの川が流れ込んでいます。こうした、川からの土砂の流入によって、瀬戸内海沿岸の砂浜がつくられます。

海浜植物

砂浜には、海浜植物という一風変わった植物が生育します。海浜植物は常に塩分を含む海風や砂の影響を受けるため、水分を蓄えるために肉厚な葉をしていたり、地面に長い茎や根を伸ばしたりして、乾燥や海風に耐える特殊な生態を持っています。

減少する自然海岸

瀬戸内海の遠浅の海岸は、古くから農地や塩田、近年では工場用地などに人々が利用し、開発の影響を受けてきました。瀬戸内海の海岸線は埋め立てなどが進み、自然海岸は36.7%（1996（平成8）年調査）しか残っていません。

このようななか、今残っている自然海岸とそこに生育する海浜植物を守る活動が行われています。



● 干潟

生きものたちのレストラン

潮汐によって、海になったり砂地になったりする場所を干潟といいます。干潟は波の影響を受けにくい穏やかな入り江や湾内で発達します。干満差の大きな瀬戸内海は全国的にみても干潟が多く、特に入り江や湾の多い周防灘や燧灘に広く残されています。

河口付近の干潟には、陸から川を通じて栄養塩や有機物が、海からは潮汐によってプランクトンが届きます。栄養塩は付着藻類や植物プランクトンのえさとなり、有機物はバクテリアのえさになります。豊富な栄養で増えた付着藻類や植物プランクトン、バクテリアは、動物プランクトンやゴカイ類、二枚貝など多くの底生生物のえさとなり、これらは魚や鳥のえさとなります。このように、干潟は瀬戸内海の生きもののえさ場として、重要な役割を果たしています。

瀬戸内海の浄化槽

干潟での干満の繰り返しは、海水中に大量の酸素を

供給し、バクテリアを活性化させ、有機物の分解を促します。これにより、干潟の砂泥が海に流れ込む大量の汚れを浄化しています。また、食物連鎖を経て生きものの体の一部に姿を変えた栄養塩や有機物は、人の手や鳥などにより、干潟や海の外に出ていきます。この働きも、海の浄化に役立っています。

しかし、瀬戸内海の干潟面積は、1898（明治31）年から1990（平成2）年までの間に約13,500ha減少しました。



● 磯

▶ 干満が大きく過酷な環境

潮汐によって、海になつたり、岩場になつたりする場所を磯といいます。瀬戸内海は外海とは異なり、大きな岩礁域はありませんが、700余りの多くの島々があり、島の間を流れる潮流や、川の水の流入による塩分の低下、冬季の水温低下などの環境により、外海域とは異なる生物相を示しています。

磯は、干潟と同様に潮の干満によって水没したり、乾燥したりと、そこに生息する生きものにとって厳しい環境です。夏は暑く冬は寒く、長時間の乾燥にも耐えられる生きものたちや、岩に付着している貝類、陰に隠れているカニ類などが主に生息しています。

▶ 海の生きものにふれあえる場所

潮が引いている磯は、海の生きものとふれあい、遊ぶ

のにぴったりです。特に、岩場にいる貝類やイソギンチャクは、海水の中にいるときと潮が引いているときで、ようすも異なります。岩場のくぼみなどに残された潮だまり(タイドプール)も、小型の魚類や貝などを観察しやすいポイントです。潮汐カレンダーのチェックを忘れずに、ぜひ磯遊びを楽しんでみましょう。



①磯
②タテジマイソギンチャク
③磯で生きもの観察

● 藻場

▶ 海の森・海のゆりかご

海中で種子植物の海草や海藻類が茂る場所を藻場といい、「海の森」とも呼ばれています。藻場の茂みは波や潮流による水の流動をやわらげ、魚の子どもが外敵から身を守る隠れ場所となります。また、葉の上などには魚の子どものえさとなるワレカラ類、ヨコエビ類などの小さな生きものが豊富に生息しており、魚の子どもが育つのに適した場所でもあることから、「海のゆりかご」とも呼ばれます。

藻場では海草・海藻そのものを直接食べる魚は少なく、葉の上などにいる生きものをついばんでいることがほとんどです。また、ウミウシやコウイカなどは藻場を産卵場所にしています。そして、藻場で生息する小さな生きものを狙って魚も集まっています。

▶ 藻場の種類

立地の違いによって藻場の種類は異なり、瀬戸内海ではアマモ場、ガラモ場という2種類の藻場が多くみられます。内湾や入り江の波の静かな場所には、遠浅で砂泥底の海域が広がります。このような場所は水深が浅く太陽光が海底まで届くので、種子植物のアマモ類

が砂泥底にしっかりと根を張りアマモ場を形成します。アマモ場は、波が穏やかな瀬戸内海の沿岸を代表する藻場といえます。

アマモ場よりも水深の深い岩礁域には、ホンダワラ類の藻類からなるガラモ場が形成されます。ホンダワラ類は海藻のなかでも大きく育ち、海底から海面に向けて直立するように育つのが特長です。

このように、潮流や地形、海底の底質や水深などの違いによって、種類の異なる藻場が沿岸域を中心に連続的・立体的に形成されます。それぞれの藻場を利用する多様な生きものが育まれ、瀬戸内海の藻場には複雑で豊かな生態系が形成されています。



①コアマモ／香川県
②ガラモ場／広島県
③コアマモ場／広島県

● 沿岸の森林

沿岸の樹林環境

瀬戸内海周辺における樹林環境は、古くは高木層にシイ類、カシ類、クスノキ、タブなど、低木層には耐陰性の強いモチノキ、ツバキなどが優占する、暖温帯に生育する照葉樹林がほとんどを占めていました。しかし、人の生活とともに、これらの植生は変化していきました。

現在、瀬戸内海沿岸地域の植生は、アカマツやコナラ、ツツジ類からなる二次林が大部分を占めています。特に強い海風や乾燥した海岸沿いの崖地に生育するウバメガシ林などは瀬戸内海沿岸の特長です。そのほかにもシイ・カシ類が優占する社叢林、針葉樹と広葉樹が混ざり合う弥山の針広混交林など、貴重な自然植生も残っています。

人の手でつくられた環境

沿岸には、人が植栽したマツもみられます。アカマツは製塩のときに燃料として使用されていましたが、高度経済成長期以降、製塩方法が変わったこともあり需要が減少し、現在ではアカマツ林が放置されることになりました。一方、クロマツは江戸時代以降に魚付林や防風林、砂防林として植えられ、現在でも白砂青松の景観として親しまれています。



1 ウバメガシ林 2 コバノミツツツジ 3 アカマツ

● 陸と海のつながり

周囲を陸で囲まれた瀬戸内海では、外海から流れ込む栄養分（栄養塩や有機物）よりも、流れ込む川からもたらされる栄養分が大部分を占めます。

草木が育つ山や森では枯れ葉や生きものの死体、フンなどがたまり、それを虫や小さな生きものが食べて分解することで土に栄養分がたまっていきます。川は栄養分のある土を流し、山や森に降った雨は地下水となって川にしみ出して、陸の栄養分は川をとおって海まで流れていきます。川から海に流れ出た栄養分は植物プランクトンのえさとなり、植物プランクトンは動物プランクトンや養殖力カキなど貝類のえさとなります。さらに、動物プランクトンはイカナゴやイワシなど小魚のえさとなり、小魚はマダイやカサゴのえさに、そして瀬戸内海の食物連鎖の頂点にたつスナメリやミサゴのえさになります。潮汐によって栄養分が運ばれた干潟では、アラムシロが生きものの死体を食べてきれいにし、魚の子どもやコウイカ、タツノオトシゴなどの産卵や成育場所であるアマモなどの藻場は、海中の栄養分を吸収して成長するだけでなく、CO₂（二酸化炭素）も吸収しています。

川の水は、もとは雨や雪で、陸上や海の水が蒸発し、空気中の水分が冷えて水滴や氷の粒になったものです。陸と川、海の関係は、それが栄養分を運ぶ大切な役割をもち、川や海の生態系を支えています。

高度経済成長期に起きた瀬戸内海の環境悪化とそれにともなう生態系への悪影響は、工場や家庭などから海に流れ込む水の汚染や富栄養化によってもたらされたものでした。その後、栄養分の排出規制などにより瀬戸内海の水質は改善しましたが、今度は栄養不足による漁獲量減少の課題も生じています。瀬戸内海の生態系は、陸と海の栄養や物質のつながりの上に成り立っています。

●瀬戸内海の大切な生きもの

瀬戸内海の多様な環境のなかで現在も命をつないでいる、貴重な生きものがいます。しかし、環境の変化や生息地の減少などにより、生息が脅かされています。



平均160～170cmの、背びれのないイルカの仲間です。日本近海において、瀬戸内海は主要な生息海域のひとつです。地方でさまざまな呼び名があり、古くから親しまれています。瀬戸内海では、フェリーや沿岸から海上付近を泳ぐ姿を見ることがあります。



シオカラトンボの仲間で、世界でも宮島と香港にしか生息しない、とても貴重なトンボです。

満潮になると海水が入り、干潮になると海水と湧水が入り交じる潮汐湿地という特殊な場所で生息しています。



約4億年前から姿を変えずにいることから、生きている化石ともいわれます。国内の生息地は瀬戸内海と九州北部沿岸に限られます。笠岡市立カブトガニ博物館では、カブトガニを楽しく学ぶだけでなく、研究やカブトガニの繁殖地の保護を行っています。



共生している褐虫藻の光合成を助けるため、日中は触手を広げています。瀬戸内海では周防大島と愛媛県伊方に生息しています。周防大島町地家室園地拠点施設では、飼育しているニホンアワサンゴを見学できます。

TOPIC

〔瀬戸内海のスナメリの呼び名〕



瀬戸内海ではスナメリはナメソ、デゴンなどマップに示す35種類の呼び名があることが知られています。地方名の存在は、スナメリが昔から人の暮らしにとても近い生きものだったことを表しており、その数の多さは沿岸の人々の生活圏や輸送動線などが複雑だったことを表しています。細かい分布を見てみると、瀬戸内海の速く複雑な潮流により、島々の往来が断絶している地域があることや、反対に海路でのつながりが深い地域があることなどが読み取れます。



第4章

歴史・文化と暮らし



瀬戸内海に息づく暮らし・生業

- 大地の成り立ちによる瀬戸内海式気候と花崗岩、潮流を活用した生業
- 自然と人の知恵、技術をうまく使いながら、時代とともに変化してきた暮らし

鞆の浦

● 段々畑と柑橘類栽培

瀬戸内海ではミカンやハッサク、ネーブル、イヨカン、甘夏、レモンなど、柑橘類の栽培が盛んです。瀬戸内海沿岸部の温暖少雨の気候風土が柑橘類栽培に適していましたこともありますが、海に面した段々畑にもおいしい柑橘類ができる理由があります。急な斜面につくられた石積みの段々畑では木が重なりにくく、木全体にしっかりと太陽の光が当たります。また、海・石垣からの照り返しにより、よりたくさんの日光が当たります。加えて、保水性に乏しいマサ土は水はけが良く、木の水分が減少して果実の糖度が高まることで、おいしい柑橘類が実ります。

このように、気候・地形地質の面で柑橘類栽培に適した瀬戸内海沿岸部ですが、決して農業に適した場所ではなく、これまでにさまざまな作物がつくられてきました。

平地が少ないため、段々畑の開墾が進められ、水田に向かない土地のため芋や麦を育てていました。急斜面での労働は過酷で、瀬戸内海式気候によって水不足にも悩まされ、毎日麓から山頂まで水を運んでいたとされています。明治期(1868~1912年頃)には殺虫剤や蚊取り線香の原料となる除虫菊が持ち込まれ、生育に水をそれほど必要としない作物だったため、和歌

山県や広島県、香川県を中心とした瀬戸内海の島々が一大産地となりました。しかし、戦後は化学薬品を用いた殺虫剤の導入などにより、作付面積は激減し、次第に生産されなくなりました。現在は、鑑賞用として、地元有志や団体などによって育てられ、5月に見ることができます。

柑橘類栽培は16世紀前半、愛媛県から始まり、明治・大正時代(1868~1926年頃)には各地で盛んになりました。特に昭和30年代(1960年前後)には、国が生産や流通面で多大な政策的補助を出したことから、段々畑は次々とミカン・柑橘類の畑へと変わっていきました。しかし、生産過剰や輸入自由化による販売価格の低迷や柑橘農家の高齢化が進み、廃園する農家が年々増えています。斜面いっぱいに築かれた石垣の段々畑も近年では十分に手を入れることができず、藪や竹林に覆われ始めています。

近年は、レモンの生産が増えつつあり、移住者が就農したり、生産・加工・販売まで手がけたりするなど、さまざまな取組が行われています。



段々畑(2009年当時)